

乳児期における音楽的行動の縦断的観察

—乳児の探索的活動と養育者との関わりに着目して—

日本赤ちゃん学会 第13回学術集会

2013年5月25・26日

山崎寛恵・森内秀夫・丸山慎

【背景と目的】

音楽的行動の発達には、自らの行為によって生じる様々な音が「表現」となることや、その音の群を構造化することに気づくプロセスがあると考えられる。乳幼児期の音楽にたいする関わり方には、他者の演奏や歌に身体を同調させる活動にくわえて、モノの物理的操作等によって生じた音に注意を向ける活動が、同時進行しているはずである。後者の活動について、丸山・荻野(2010, 2011)では、偶発的・物理的に生じた音から、表現としての音の生成への移行を方向づける契機となる活動を「探索的活動」とし、その多様性に着目してきた。本研究ではこの「探索的活動」をさらに観察し、顕著な特徴を挙げるとともに、探索的活動の多様性、すなわち探索の種類の変化に養育者がどのように関わっているのか明らかにすることを目的とした。

【方法】

本研究は、観察に関する協力の同意を得た3組の親子を対象に実施した。家庭用デジタルビデオカメラを使用し、養育者と乳児の自宅での遊び場面を月一回の頻度で撮影した。遊び場面では、卵型マラカス(キッズパーカッション:エッグマラカス)2個、グロッケン(アウリスグロッケン:ダイアトニック8音)、バチ1対(木製とゴムの2種で1歳頃から木製に変更)、ビニール製動物人形(腹部を押すと音が鳴る)の玩具を使用した。遊び方や順序は特に指定しなかった。分析場面は生後6~18ヶ月齢の期間、撮影開始から10分のウォーミングアップを経た後の10分間とし、養育者と乳児のそれぞれのアイテム操作を、接触時の音の発生の有無と、操作するアイテムの種類に着目した。

【結果】

① 探索活動の特徴

ただ触れる>音をならす

養育者の操作は音をならすことに特化している傾向があるのに対して、乳児は全時期を通してただ触れるほうが多かった。

組み合わせのバリエーションは一旦増加し、減少する

養育者も乳児も異なるアイテム同士を組み合わせることがあった。乳児の場合、6ヶ月齢頃はアイテムを単体で扱っていたが、その後組み合わせのバリエーションが増加した。一旦組み合わせが生起すると、どの月齢でもグロッケンーバチの組み合わせの頻度が最も多く、18か月齢にはグロッケンーバチという特定の組み合わせに収束していった。

② 探索的活動の多様性に対する養育者の関わり 探索的活動は、探索する対象物そのものを変えることと、同じ対象物に対して接触の方法を変えることの二水準で変化し、そのような変化が探索の多様性を特徴づけている。養育者はそのような変化に2種の関わり方をしていた。一つ目は、乳児が人形同士を接触させている→養育者が人形を押す→乳児が一つの人形を操作し始める、というようにアイテムから生じる音を変える方法であり、二つ目は、乳児が人形を操作している→養育者が背後にあったバチをグロッケンの上に置く→乳児がバチでグロッケンを叩き始める、というようにアイテムの配置を変える方法であった。

【考察】

行為によって音が生じるという当然の出来事が、この時期の乳児の大きな関心事となる。養育者による場合であれ、乳児自身による場合であれ、それは音の発生源となる様々なアイテムへの接触(操作)を動機づける。本研究では、周囲にあるアイテムを多様に操作し、組み合わせるといった音の多様性の時期を経て、バチで鍵盤を叩く「グロッケンの音」に収束していく過程が観察された。生後6~18ヶ月齢は、音の出るアイテムへの接触は楽器演奏というよりも、音とその源であるアイテムとの接触の性質を調べることに主であり、まさに楽器性を探索するの時期であった。

また、乳児のアイテムに対する多様な操作が、音楽的行動につながる探索行為であるとするれば、操作のバリエーションがどのように生起するのかが重要な問題である。本観察では、養育者と乳児のやりとりから生じる「アイテムから出る音の変化」と「アイテムの配置の変化」が、乳児の注意の転換を促し、探索の種類を変化させ、結果として探索自体を持続させていた。養育者が様々な形式で乳児の注意に働きかけること、そして乳児の行為が母親の注意促進行為を方向づけることは、言語発達に関わるコミュニケーションの重要な特性であるが(Zukou-Goldring, 1997)、初期の音楽的行動の発達においても、そのような音とそれを生成するアイテムを介した注意のやりとりが関連している可能性が本研究では示唆された。